

室井尚×吉岡洋 連続講座

哲学とアートのための

12の対話 — 「現代」を問う

テーマ ③ 「役に立たない」アートのために



第3回 「役に立たない」アートのために

吉岡 洋 (進行 安藤泰彦)

安藤 では時間になりましたので始めたいと思います。暑い中お越しいただき、本当にありがとうございました。今日は2回続けてということで長丁場になりますけれども、よろしくお願ひします。では今日も最初に、3月12日に行ったプレ講座の中から、今回のテーマに関わる部分を抜き出して編集した映像をご覧ください。



<https://youtu.be/60l9SB4Ja7I?t=719>

プレ講座 (2023.3.12) 記録映像 — 第3回「役に立たない」アートのために

吉岡 前回の6月は雨でしたが、本日は7月の猛暑の中をお集まりいただきありがとうございます。今回は夏休みの集中講義みたいな感じで、2回分を連続で行うことになっています。聴いていただく方は長時間で大変かもしれません。喋っている僕自身はそれほど大変じゃないんですけどもね。先週の土日は勤務校である京都芸術大学の集中講義で、朝9時半から夕方5時まで5コマの連続講義をやったのですが、けっこう平気でした。話す方は楽しいんですが、聴いていただく方は大変かもしれません。

さて、今日の1時間目は〈「役に立たない」アートのために〉というテーマです。これは室井さんが決めたテーマなのですが、「役に立たない」とカギ括弧が付いています。まず最初に、このテーマを提案した室井さんが自分自身アーティストとして関わり、横浜トリエンナーレに出展した作品「インセクト・ワールド」の話をします。これについてはよく知ってる人もいるだろうし、実際観たという方もおられると思うんですが、はじめて聞いたという人もいると思うので、最初にこの紹介をします。

これは2001年の「横浜トリエンナーレ」という国際美術展に出展された作品なのですが、そもそも国際美術展というのは日本において、2000年ぐらいまではあまりなかったんですね。そのずっと以前には、たとえば1950年代に始まった「東京ビエンナーレ」というのがありました。特に1970年に美術評論家の中原佑介が企画した「人間と物質」展は有名ですが、その後30年間は国際美術展としてそれほど目立った催しは日本では行われませんでした。それが2000年前後になって大規模な形で開催されるようになりました。1999年には新潟の越後妻有で「大地の芸術祭」、2001年には「横浜トリエンナーレ」、そして「愛知トリエンナーレ」とかありますけども、そういう巨大なもの以外にもいろんな地域で開催される中小のトリエンナーレ、ビエンナーレといった国際展が急に増えました。「横浜トリエンナーレ」はそうした中でも非常に規模の大きなもので、その2001年の第1回に、室井さんと椿昇さんが出展アーティストとして招待されたわけです。ディレクターの一人であった河本信治さんによるオファーですね。

何を作るかはまったく決まっておらず、二人でああでもない、こうでもない話し合っただけです。

その結果、最終的に行き着いたのが、みなとみらいにあるパシフィコという高層ホテルの壁面に、巨大なバツタのバルーンを設置するというアイデアですね。そういう作品を構想し、実現したということです。室井さんは後に『巨大バツタの奇蹟』という本を書いて、その中にこの作品の構想や実現の経緯が詳しく書かれています。この本は何冊か準備しており、ご希望の方は購入することもできますので、休み時間に申し出てください。

そもそもなぜバツタなのか、と誰でも疑問を持つと思うのですが、その経緯も書いてあります。二人で観覧車に乗ってみなとみらいの風景を見ながら、ここに何が出現したら面白いかと考えて、子供の頃の昆虫への興味とか、その昆虫が巨大化して大都市に現れたら面白い、というような話になったのです。それで、椿昇さんが教えていたIMIという学校の学生にCGを描いてみると頼んだらいくつか作ってくれた。その中のこの写真を見て、そのイメージに圧倒されたのだそうです。この画像のバツタはものすごく、ほとんどホテルの建物に覆い被さる巨大なものです。たぶんこれだと全長150メートルくらいでしょう。実際に実現された作品は50メートルくらいで、ここまで大きくはないのですが、とにかくこのイメージが強烈的な印象を与えたのです。見た瞬間にこれにしようと思ったと。



バツタCG案

……「どうしてバツタなんですか?」とよく聞かれた。その度にいろんな答えをひねりだしてきたのだが、なぜだか誰も納得はしてくれなかった。実際のところどうしてなのかはぼくたちにもよく分からない。いろんな虫のディスプレイを考えたことは確かだ。多分、このCGのせいではないかと思う。福田泰崇君という椿の教えているIMIの学生が作ってくれたこのCGが余りにインパクトがあったせいで、椿にしても他の案が考えられなくなってしまったのではないか。そしてその点においてはぼくも同様であった。(室井尚『巨大バツタの奇蹟』、(株)アートン、2005年、p.26)

どうしてバツタなのか。横浜、みなとみらいといった場所から自動的に連想されるのは、多くの人々に愛される海の生き物、イルカとか、前回の講座で話題になったウミガメとかですね。それに対して、巨大なバツタなんて気持ちが悪いと思う人もいる、イルカじゃダメなんですか?とも聞かれたそうです。たしかにイルカだったら誰が見ても可愛いし、横浜でイルカなら常識的な意味で理屈が通ってる感じじゃないですか。これはたんにアート作品として作るものじゃなくて、営業中の高級ホテルの壁に設置するものですから、そういう面からも理解を得る必要があった

わけです。横浜とバッタと何の関係があるのか、というようなふつうの疑問に対して、でもイルカでは絶対に駄目なんです、と主張しなければならなかった。これはアート作品なんだから、気持ちいいものじゃなく、むしろ抵抗感を感じさせるようなものでなければならない、と。

バッタを作るのはどうか、ということ当時僕も聞きました。その頃は室井さんは横浜にいて、僕は京都と大垣を往復する生活だったので、電話とか学会などで会った時ですね。まだ完全に決定していない段階で、バッタどう思う?って聞かれて、僕も即答できなかつた。子供の頃、バッタはそこらじゅうにいてよく捕まえたりもしました。カブトムシやクワガタもよく山に獲りに行って、自分で虫籠を作っているような虫を入れて、夏休み中見ていましたね。ただカブトムシやクワガタはデパートでも売っているというような時代で、つまり昆虫採取に行けないような地域の子供にとっては、お金を出して買うものになっていました。それに比べてバッタは、ありふれているので商品価値はない。

イルカとかクジラとかウミガメとかいった生き物は、もちろん彼らにとっては迷惑な話だろうけど、「大切な地球環境」といった人間のロマンティックなイメージが投影される、特別な生き物ですよ。それに対して昆虫はキモチ悪いという人もおり、けっして美しい「自然」の代表ではない。昆虫の中でもまだ、カブトムシやクワガタはわりと人気があるのですが、バッタは微妙ですよ。昆虫を代表しているわけでもないし、あんまりデザインとしても利用されない。珍しくないからね。大量発生すると農業被害をもたらすこともある。北米などに比べると日本ではそれほど害虫として忌み嫌われているわけでもないけど、まあどこにでもいる平凡な虫なんですね。

でもたしかに子供は昆虫好きで、バッタも好きですね。僕も捕まえてきて虫籠に入れ、毎日何時間も見ていたことがあります。どうして昆虫の動きはあんなに面白かったのか。それを以前、室井さんと話し合ったことがあります。そもそも男子の多くは機械、メカニズムが好きだけど、昆虫って機械みたいなんですね。生き物なのに機械みたいというか、生命と機械との中間みたいな存在なんです。だから身体の仕組みや動きを見ているだけで面白い。

テレビの自然番組に登場するサバンナや密林の野生動物、イルカやクジラなど海洋哺乳類などが代表する「母なる大地」とか「美しい地球」とかいった自然のイメージは、人類史の中では比較的新しいものなんですね。19世紀以降と言ってもいい。それ以前も自然美というのは認識はされていたけれども、その反面自然とは容赦ないメカニズムでもあり、人間にとって両義的な存在だったのです。どうして19世紀以降に自然がロマンチックに理想化されていったかという、簡単に言うと産業革命によって文明が機械的なものになったからです。都市生活も工場労働も、時計によって計測される均質な時間の中で、効率の最大化を目指して営まれる活動になった。その結果「機械が文明で、生命が自然」というような単純な対立が支配的になりました。自然はいわば文明を補償する存在、機械化された文明の中で疲れた人間を癒してくれる存在になったのです。現代の私たちも基本的にはそうした構図の中に生きています。

で、そのようにロマンティックに理想化された自然を代表するのが、イルカやウミガメのような自然動物なんですね。そこに(科学的な根拠が乏しくても)「絶滅が危惧される」みたいなイメージが伴うと、さらに価値が上がる。テレビなどのマスメディアはこれを利用します。それに対して昆虫、とりわけバッタのような生き物は、そういう理想化された自然をちっとも代表していません。バッタなんて地上からいなくなっても別に困らないと、多くの人は思っているかもしれない。そういうふうに考えると、横浜のみなとみらいの真真中に巨大なバッタを出現させるというのは、すばらしい選択だったと思います。でも室井さんたちがそれを思い付いた時には、そんな細かい理屈は考えてなくて、このCGを見てこれだ!と思ったというんです。

その後、横浜国立大学の集中講義に呼んでもらって二人で対談講義みたいなことをした時にも、

昆虫や自然についての話題も出ましたね。現代人は「自然」と聞くと、山の中とか森林とか海とか、とにかく文明の影響が少ない場所にあるものだと何となく思ってしまうのですが、実は人間の身体自体が自然物だし、広い意味では人間の文明や文化も自然に浸透されているのです。文明と自然とは対立しているのではなくて、自然が全てを貫通している。

都市生活をしている人でも、実は野生生物に囲まれています。僕は一昨日の夜、家の近くでタヌキに遭遇しましたが、それはあまりないとしても、家の中にもペットじゃない生き物はいますよね。肉眼で見えないものまで含めたらキリがないけど、昆虫もいます。たとえばゴキブリだって野生生物です。ペットでも家畜でもないからね。でもゴキブリを通して自然の生命の営みを思う人は少ないでしょう。むしろゴキブリは嫌いな人が多いと思うのですが、実は人間がゴキブリをこんなに忌み嫌うようになったのはごく最近のことなのです。1970年代以降かな。ゴキブリはずっと昔から人間の住居で共存してたんですが、昔は家屋の気密性が低く暖房設備も不十分だったから、あまり増えなかったんですね。ゴキブリって寒さに弱いから冬になると数が減るんです。まあそんなにたくさん出てこなかったから人間も許容してたということですかね。でも戦後になって建物の中が冬でも暖かくなり、食べ物も豊富になったので増えたんですね。それで、ゴキブリの殺虫剤を販売すればビジネスになるということが分かって、私たちがそれを買いたくなるように、ゴキブリは不潔で駆除すべき虫なんだというネガティブキャンペーンを、テレビのコマーシャルなどを使って始めたんですね。

実際にはゴキブリは人間を刺すわけでもないし、毒も持っていない。危険な病原菌を媒介する昆虫でもないから、まあ放っておけばいいような存在なのです。しかしバツタと同様、護るべき自然環境というイメージを背負っている生き物ではないから、この殺虫剤を使ってみんなを殺しましょうというキャンペーンを張っても、文句を言う人はいない。そしてそういうコマーシャルを子供の時から見て育った人は、ゴキブリが本来どういう昆虫かなんて知らなくても、見たらキャー!と叫んで殺すという反応を刷り込まれてしまいます。

前にこの話を授業でしたら、先生、そもそも「ゴキブリ」という名前が気持ち悪いですと言った学生さんがいましたが、それも刷り込みです。ゴキブリはゴキカブリが訛ったもので、ゴキとは御器、つまり蓋付きの塗りのお椀のようなもので、それを被る（一説には^{かじ}囓る）というようなことでしょうかね。そんな、生理的嫌悪をもたらすような名前ではなくて、むしろ趣のあるというか、きれいなイメージなんです。まあ、僕が今こんな話をしたからといって、急にゴキブリが可愛く見えてくる人はいないでしょうけど（笑）。この話は共感者が少ないのです。前に音楽学者の岡田暁生さんと、彼も昆虫には詳しいのでゴキブリの話で盛り上がったら、周りの人たちは気持ち悪そうに聴いていました。

すみません、バツタから話が逸れてしまいましたが、バツタもゴキブリほどではないにしても、人によってはあんまり好きじゃない、気持ち悪いと感じる人もいるでしょうね。それを全長50メートルの巨大なバルーンにして、ビルの壁面に設置するというわけですから、法律上のこともクリアしなきゃならないし、工学的な可能性、安全上の問題、そしてもちろんホテル側にとっては宿泊客の反応とか、営業上からも許可をとらないと実現できないわけですね。

だから最初はいろんな抵抗に遭ったんです。そんなことできるわけじゃないじゃないですか、何考えてるんですかみたいに怒られたり、それからやっぱりホテル側からすると、なぜバツタなんですか、イルカではダメなんですか、みたいな反応もある。でもいろんな人たちと話しあい説得してゆく過程で、予測しなかったような反応にも出会うんですね。建物を管理する仕事の人から、面白いからぜひ実現させましょう、と共感を示されたり。いわゆる狭い意味での現代美術の作品として理解しているわけではなくて、なんだかわけが分からないけどワクワクする、何の役に立

つ仕事でもないけどぜひやってみたい、と味方になってくれる人たちが出てくる。それがこの本の中で非常に面白く感動的な部分です。

ここから分かることは、よくアートなんて現実の社会や生活には役に立たない、不要不急というか無駄なものであるというレッテルを貼られますが、実は現実社会に生きている人たちの中には、自分からやることはできないが、アーティストが作品制作という形で常識的な秩序とか価値観の中に介入してきてくれたことを、歓迎する人が少なからずいるということです。アートの力っていうのは何も、その作品の意味を最初から理解していたり、美術のファンだったりするような人にとってだけじゃなくて、普段そんなことを全然考えたこともなく、最初は何か抵抗感を持つような人の中にも、反応を引き起こすことがありうるということだと思います。

「〈役に立たない〉アートのために」ということで、もう一つ室井さん書いたものから引用します。『ポストアート論』という本の中からですが、これはアートと哲学的思考の関係について書かれた箇所です。

……多くの哲学者たちは、なぜ「芸術」や「芸術作品」についてあれほど膨大な思考を捧げたのだろうか？ ……ここには芸術とそれをめぐる言説との間の秘密の相互基礎づけ構造とでもいったものが潜んでいるのだ。

そのメカニズムは簡単に言えば次のようなものである。まず、芸術が思考にとって解くことのできない謎、あるいはパラドックスとして現前しているとされる。思考はその謎の周囲を円環を描きながら包囲する。だが、それはまた思考自身によって要請された謎でもあるのだ。なぜなら、パラドックスが要請されるのは、言語や思考の限界を示しそれを挫くためではなく、むしろ逆に、その全体を活気づけるためなのである。

(室井尚『ポストアート論』、白馬書房、1998年、pp.24-25)

ちょっと抽象的というか難しい印象を持たれるかもしれませんが、哲学者はなぜアート、芸術について考えるのか、という問いです。たしかに哲学者、思想家と言われる人々が、芸術や芸術作品について論じた例は少なからずあります。哲学者はアートが好きかどうかは分からないけど、議論の対象としてのアートには魅了されるんですね。哲学的思考にとってアートは「謎」として現れるけど、同時に哲学的思考自体が動くためにそうした「謎」を必要としている。両者には切っても切れない関係があり、そこには「相互基礎づけ構造」があるという。

「相互基礎づけ構造」って難しい概念のように響くかもしれませんが、どういうイメージかというと、例えばマウリッツ・エッシャーという人が描いた「描く手」という有名な素描があります。鉛筆を持った右手と左手が、互いに互いを描き合っているという不思議なイメージです。哲学的思考と芸術活動とは、そうした関係にあるのではないか、ということです。

ここでバッタの話に戻ると、なぜバッタなのかということはひとつの「謎」ですね。それが芸術です。この謎を突きつけられて、私たちが常識的に抱えている自然観、自然の生命を代表するとされる生き物たちのイメージについて、なぜイルカでなくバッタでなければいけないのか、といったことを考える。これが思考です。でもそれは、単純に謎を解いているのではないのです。いや、謎を解こうとしているのかもしれないが、最終的な「正解」を求めているわけではない。なぜなら思考が深まるほど、それは新たな謎を要請するからです。謎が謎を生み、思考が活動する新しい領野を作り出す。芸術と哲学的思考とは、そういう関係にあるということです。

僕みたいに美学者とか芸術学者とか名乗っていると、アート作品の謎を解いてくれる、分からないものを分かるように解説してくれることを期待されることも少なくありません。まあ実際には何を話しても、聴く人が持っていなかった知識を与えることになるので、それが解説として受け取られることも多い。別にそうした聴き方が間違っているとはいいませんが、本質的なレベルでは、芸術作品をめぐる思考とは作品の意味を解説することではありません。そうではなく、作品を手がかりとして思考の迷宮に誘うということです。これはこの講座の第1回のテーマ「考える＝道に迷う」ということとも密接に関係していることなのです。

作品についてうまく解釈できた、解説として「成功」した場合ほど、言った瞬間に「ああ違うな、そんなワケはない」って思いますね。これが「謎が謎を生む」ということで、思考がさらに先に進むように求められているという感じがします。だから、よく講義や講演の後に感想を訊いたりアンケートを取ったりしますが、そこで「先生の話を聴いて目からウロコでした」みたいな感想があると、もちろん褒め言葉として書いてくれていることは分かるんですけども、こちらの気持ちとしては微妙なんですね。そんなに簡単に分かれていいのか、と。

「目からウロコ」というのは、『新約聖書』由来の比喻ですね。使徒行伝に出てくるサウロという人が、最初はイエスを迫害していたのに、ある時イエスの霊に出会って光のために視力を失い、キリスト信者の祈りによって3日後にまた見えるようになった時、目からウロコのようなものが落ちて、信仰に目覚めたというのです。この人が改名してパウロですね。現代ではそういう話は大方忘れられて、物事の真相が見えるようになったというような意味で使いますが、ちょっと簡単に使いすぎのように思います。重要な問題は、そんなに一瞬で分かるようになることは滅多にありません。

室井さんのテキストに戻ると、芸術は思考にとって謎として現れるのですが、その謎は思考自身が求めて作り出した謎でもある、ということが大切だと思います。こういう謎は、「目からウロコ」のように一瞬で劇的に解けるということはありません。謎はもちろんそれを解くようにと思考を誘惑するのですが、正解に到達して謎が謎でなくなることが目的ではなくて、それによって更なる謎が生み出され、思考が常に活性化されていることが大切なのです。

別な言い方をすれば謎というのは言葉、言語の限界を示すものでもあります。謎によって私たちは、自分たちが使っている言語の限界を自覚させられる。けれどもそこで行き止まりではなくて、むしろ言語の限界を知ることが思考をさらに前へ進めるというパラドックスがある。これが、芸術と哲学の関係についてというトピックです。

最後に自分が最近書いたテキストからご紹介するのですが、これは先月出たばかりの『ひらく』という雑誌に書いたものです。これは社会思想史の佐伯啓思さんが監修されている雑誌で、僕はここに2年ほど前から「美学のアップデート」という連載をしています。その第6回「目的なき合目的性」が、そもそも役に立つとは何かということに関わるテーマなので、少し抜き出してきました。

そもそも何かを判断するには、その判断を規定する何らかの根拠が必要である。その根拠のひとつは、ある対象が特定の目的に適っているかどうか、ということだ。言い換えれば何か「役に立つ」のかどうかということである。役に立つかどうか……緊縮財政のために常に財源を気にしなければならず、一番目的に適ったものだけに「選択と集中」を強いられている現代社会が、強迫的に束縛されている判断形式だと言えよう……。

美的な判断においては、対象が手段として奉仕するような特定の目的は見えない。つまり、ある対象についての私たちの判断は、それが「何の役に立つのか分からない」という状態に置かれている。だからといってそれは「何の役にも立たない」というわけではないし、判断はまったくの恣意的な決定——Anything goes! (何でもアリ!)——というわけでもない。美しいものは、確かに何かの役に立っているかのように直感されるのだが、その「何か」が明示できないのである。目的が分からないのに、いったいどうしてそんな判断が可能かという、それは私たちの精神活動を形成する諸要因——世界を理屈で把握する「悟性」や、異質なもの同士を結びつける「想像力」——が、互いを活性化するように刺激し合い、それが私たちの生命力を促進するという知覚が生じるからである。ようするに「面白い」「興が乗る」という経験である。

(吉岡洋「美学のアップデート⑥——目的なき合目的性」、佐伯啓思監修『ひらく』、エイアンドエフ、2023年、p.223)

役に立つとか立たないとか、役に立つものしか意味がないというようなことは昔から言われてきた決まり文句ではあるんですけども、現代どうしてそれがいろんな局面で言われるようになったのかというですね、それは今私たちが置かれている状況、特に日本の状況を念頭に置いて言ってるんですけども、アートに限らず何をするにしてもお金が要るから、ではそのお金を誰が出してくれるのか、どこから財源を引っ張ってくるのかということ、みんなが気にするような社会状況があるからだと思います。

芸術や文化は、それを担う個々人はある程度時代状況から独立している場合もありますが、全体としては政治経済の状況と切り離して考えることはできないと思います。日本は1990年代の後半以降、グローバル化と新自由主義的な政策が支配的となり、政策的には緊縮財政、つまり政府ができるだけお金を使わず、公共的な事業を可能な限り民間に委託するという方向に進んできました。ただしこの3年くらいは、コロナや戦争の影響で国債発行による財政支出をしないわけにはいなくなり、歴史が新しい局面に入りつつあります。

それでもまだ、できるだけお金を使わないことが善であるという今までの方針は継続しており、本当に必要なところだけに支出すべきだという価値観があります。つまり「選択と集中」ですね。それは言い換えれば「役に立つ」ところにだけ投資するということです。逆に言うとならないところは削減するということですね。たとえば戦争の影響で防衛費は戦後あり得なかったほど増額されていますが、これまではほんの少し増額されても大騒ぎしていた左翼系新聞もまったく騒がないし、反対運動も起こりません。それは防衛費は必要であるという意識が世論として広がっているからですね。防衛費が本当に「役に立つ」ような事態が生じたら困るのですが。

役に立つことだけに出資するというのは一見筋が通っているように聞こえますが、重要なことは、何が将来「役に立つ」かなんて、あらかじめ分からないということです。そういうものが世の中にはたくさんあります。軍備だけでなく、警察や消防のようなサービスも、「役に立つ」ようなことがあっては困る。設備や人員はふだんは余っている方が、つまり費用対効果がない方が望ましいわけです。また教育や文化も、すぐに明示的な効果が出るわけではないし、学術研究の分野に関しても、未来において何が発展に結びつくのかなんて分からない。どうせ分からないのだから、全部に投資しておくことが重要なのです。

つまり「役に立つ」かどうかという判断は、一見自明のように見えるけれど、実はそういう判断自体に限界があって、非常に限られた事態においてしか有効ではないということなんです。で

はそれ以外にどんな判断が可能かと考えた時、重要になってくるのが美的な判断なのです。美的判断というのは、何かが役に立つかどうか、つまり手段と目的という基準の外に立つことです。美的な判断においては、対象が手段として奉仕するような特定の目的は見えない。室井さんが「バツタしかない」と決めた時のような判断ですね。何でバツタなんですかと訊かれても、後から色々理屈は考えられるだろうけど、それが判断の根拠であるわけではない。根拠は分からないんです。

わざと「何の役にも立たない」ものを選んでるわけでもありません。美的判断は全くの恣意的な決定、「何でもあり」というわけでもない。イルカでもカブトムシでもなく、バツタでなければいけなかったんです。それは、バツタがいちばん「面白い」と感じられたからです。この「面白い」という判断を美学的に説明すると、それは私たちの心を構成する様々な能力、思考したり想像したりする力が、ある対象に対して働きながら心それ自体を活性化するというか、生命力を強めるように作用するということです。それが「面白い」「興が乗る」という経験なのです。

「美学のアップデート」第6回のサブタイトルにしている「目的なき合目的性」というのはカント哲学の概念ですが、面白いのはカントはこの概念を美的判断に関してだけでなく、自然についての目的論的判断に関しても言っていることです。自然そのものは目的を持たないメカニズムなんですけど、私たちがそれを判断する時、とりわけ生きた自然、有機体や生物について考える時には、自然はあたかも目的に従って作られ作動しているかのように見えるということです。……というような言いつつ、こういう話をしていると、もしも横に室井さんがいたら爆睡しているんじゃないかな、と今思いました（笑）。またカント哲学の話か、と言って……。

僕にとって18世紀の哲学が重要である理由は、たとえばそれが現代の私たちが無意識に受け入れている常識的な自然観から、距離を取ることを可能にしてくれるからなのです。先ほども言ったように、自然を何か生命を育む母なるもの、疲れた心を癒してくれるような存在として想像するのは、産業革命以降の機械文明の中で、その対極としてロマンティックに理想化された自然のイメージによるのです。それは実は自然そのものではなくて、機械的な生活に疲れた私たちに安らぎを与え、明日からまた機械的仕事に戻るようにリフレッシュしてくれる存在で、いわば機械文明の一部と言えます。

それに対して18世紀哲学においては、自然それ自体が容赦なく働く機械そのものです。ただ生きた自然に関しては、私たちはそれを（目的は分からないが）何らかの目的に適っていると判断せざるをえないということです。自然は神様が作ったわけではないけど、あたかも神様が何らかの意図をもって創造したように見える、その認識は人間理性の本性から来るものであるということです。こうした200年以上前の哲学、産業革命以前の自然観が、ある意味で、発達した情報技術や人工知能が存在する現代の状況の中で、新たなリアリティを持ち始めているような気がするのです。

キリスト教のような宗教がまだ力を持っていた時代には、人間ごときには計り知れない神の意図というものが、世界の目的の最高位にあったわけですね。だから、人間には役に立つと思われないようなものでも、神様の目的には役に立つかもしれないので、だから人間基準の「役に立つ」一辺倒で世界を判断するという狭隘な世界観からは免れていたとも言えます。昔の「科学者」というか自然研究者はみんな有神論者ですからね。自然の働きについては合理的に理解しようと研究するけど、自然の究極的な原因である神の存在は否定しません。

世界から神様の目的が完全に排除されるのは19世紀以降ですね。世界に神の目的がないとすると、あとは人間の目的しかなくなります。するとすべては人間の役に立つために存在すべきであるという、人間中心の世界観になってしまいます。世界の究極目的が人間ということになっ

てしまいますが、これは別な言い方をすれば人間が宇宙の中に宙吊りになってしまうということでもあり、ある意味たいへん苦しい世界です。人間は虚無にとり囲まれた不安な存在である。ここから実存主義的な世界観が出てきます。不安で仕方がない。かといって神様を呼び戻すわけにもいかない。これが私たちの置かれている状況ですね。

最後は哲学的な話になりましたが、時間が来たので第3回の僕のお話はここまでにしようと思います。



イラスト／谷本 研

参加者との対話

発言者A 役に立つというのは、これから目指すべき目標ではないと思うんです。アートであれば、そのアートコミュニティに所属する以外の方が、何かしら、社会にとってアートにはこんな機能があると示したらいいんじゃないかなと今思ってます。やはり経済っていうものがすごく強い。社会にとって必要なものを作り出して、その必要なもので得られた対価を、それを提供したコミュニティに賃金として再分配して、そのコミュニティの生活に必要なものを供給する。このサイクルが経済だと思うんですけども、その経済と双璧を成すような文化芸術の機能を社会に示すことは、別にアートの当事者が目指さなくてもいいと思うんです。

経済は実現可能性の高い必要を作り出して、生活を賄わないといけないので、どうしても実現可能性の高いサービスを提供したり、テクノロジーに付随する商品やサービスをどんどん作っていくと思うんです。けれども、その外側にある社会の可能性であったり、社会について思索する態度みたいなものが、文化芸術に備わっているんじゃないかと思います。例えば実現可能性の高い未来が行き詰まりそうになった時に、実は他にもこういう可能性があるといったことを示せるんじゃないかなと思うんです。

経済っていう分母の上でおんなじような商品があったとしても、こっちが格好いいからこっちを買うというようなことも、たぶん情緒が豊かになったからで、文化の力で情緒が豊かになって選択していると思うんですね。それも文化芸術の力だと思う。でもそれは、経済という分母の上で動いている分子としての文化芸術だと思うんです。

けれども、分母としての文化芸術ってというのは、さっき言ったような、未来を思索する表現であったり、そういうものにあるんじゃないかと。特に現代アートには多分そういう機能もあると思いますし、例えば教育でも桜島学校（#鹿児島の小中学校を統合する「義務教育学校」のことか？）だったかな、確か。生涯賃金を上げるような経済のルール、人生のルールみたいなものがあると思うんですけど、小中学校の義務教育期間に基礎学力を上げて、高校では入試のための学力を身につけて、偏差値の高い大学に入って、学士課程を卒業して就職して、必要なキャリアを磨いて生涯賃金を上げていくという、一つの経済のルールみたいなものがあると思うんです。桜島学校っていうのはまだ始まってないんですけど、義務教育のところで戦前の教育の良さを取り戻す面もあり、基礎学力のところではこれまでとは違う社会の可能性に線路を切り替えていってると思うんですけども、そういったことが文化芸術の考え方だと、示唆している批評家もいます。このように誰にでもわかりやすい形で文化芸術の機能を世界に示していくっていうのもあるのではないかと思います。

吉岡 「桜島学校」というのはよく知らないのですが、教育にはもっと自由度があった方がよりよく機能することは確かだと思います。これまで教育は基礎学力の養成ではなく、いかにして現在のグローバル化社会に適応するかという観点で、小中学校から英語コミュニケーションとか情報教育とかを導入してきた。つまり文化芸術ではなく市場経済の基準で教育改革をしてきたわけですが、効果は上がらなかったどころか学力はどんどん低下している。誰がみても明らかな失敗です。にもかかわらず、他の「改革」主義と同様、効果が上がらないのは改革が足りないからだという狂った考えに突き動かされています。

アートがそのコミュニティの外で役立つ、機能するということについては、そうですね、最近「ア-

ト思考」について何か話してくださいと言われることが時々あるんです。少し前には「デザイン思考」っていうのが流行ってたような気がするんですが、そのバージョンアップみたいなものかな。今ご質問していただいた趣旨は、芸術のコミュニティの中にいる人、アーティスト自身は社会のことを気にせず好きなことをやるのがいいけれども、その「好きなことをやる」ということが社会にはどう還元されるかを、説明できる人がいなきゃいけないということだと思います。

「アート思考」と言われる時の「アート」って、芸術一般ではなく現代アートがモデルになっていると思います。たとえば、私たちは「まったく何の役にも立たない」巨大なバツタがすごいなっと思う。でもこの「すごい」と思う感覚は、私たちが西洋19世紀以降のモダニズムとか前衛芸術を経験した後にはじめて可能になっているものです。それ以前の古典主義的な時代、例えばイタリアルネッサンスみたいな世界では、芸術家自身が自分の制作活動を維持していくのに、パトロンとなる王侯貴族に対して、私の活動はこんな役に立ちますよとか、こういうものも作れますよということを、自分でマネジメントしてアピールするのが普通だったんですね。

芸術家って、ひらめいたものをとにかく実現したい、そのためには金が必要という発想よりも、どうやったら金が出るかということも自分で考えていた時代の方が、むしろ長いんですよ。現代の私たちはそういう風には訓練されてない。お金の世界は芸術の外にあるかのように考える。美術の学校では美術のことだけを教える。昔から見るとちょっと、分業され過ぎているとも言えます。とはいえ、状況は昔も今も基本的には同じなんじゃないかなと僕は思うんですよ。巨大なバツタって本当に役に立たなかったんですかっていうと、けっしてそんなことはない。実はめちゃくちゃ役に立ったんですね。第1回横浜トリエンナーレのシンボルになりましたからね。最初は「何じゃこれ」って思ってた人も、結局はいろんなところで画像で使われて、もう「ヨコトリと言えばバツタ」みたいなことを否定できなくなった。

室井さんや椿さんは、バツタを発想する時に、けっしてそのように役立てようと戦略的に計算したわけではないでしょう。いや、少しは計算したかもしれないが、計算が先にあつたのではない。だから結果として役に立ったとも言える。結果として役に立つところまで見据えてマネジメントをしてくれる人がアーティスト本人なのか、周りにそういう人がいた方がいいのかは、また別の問題だと思います。現代においては、アーティスト自身がそういうマネジメント能力も求められているという側面はある。

発言者B 今お話しされていたことの延長なんですけど、アートが「役立つ」ということで、最終的にたとえば共感を生むとか、人生が変わるとかっていう役割もあると思うんですけど、吉岡さんにとって、こんな想定外の役立ち方があつたとか、こういう影響を与えたとか、思ってもいなかったような役立て方があつたというような例が、何かありますか？

吉岡 思ってもいなかったような……。真正面から聞かれると考えてしまう。今いちばん思ってもみなかった展開というのは、この「哲学とアートのための12の対話」が、どうしてこんなに盛り上がりつつあるのかっていうことが本当に不思議なんですよね。いろんなところで驚かれるんですよ。こういう哲学系のトークイベントで、何で80人も集まるんですかって言われる。普通こういうのって、30人ぐらいで大成功なんです。

これはもちろん僕の話が面白いからじゃなくて、この講座が最初は室井さんと対話するつもりだったのに、直前に彼が亡くなって、それでも中止しないでやっているということの異常さによるものですよ。なんでこんなワケの分からないことをしているか。この部分に、この対話イベントにおけるアーティスト的な成分があるんじゃないかなと思う。そこで何をしゃべったらいいのかわ

ていうのが、僕にも最初わからなかったんですけど、何を喋るかという内容よりも、自分の「地」を出すしかないと思うようになってきた。こういう展開って、やっぱり思いがけなかったことだと思いますね。若い時は一生懸命計画して、優れたコンテンツを作ればいいんだと思ってた。でも今の僕の話って、あんまりコンテンツないでしょ？ いや、結果としてはあるのかもしれないんですけど(笑)、それよりも僕が哲学やアートのいろんなトピックに、どんな態度をとっているかということが伝わると思ってるんですね。

発言者C 先ほどの質問に対する私からの回答のようなことなんですけど……。私は大学生の時に横浜で育ったんです。普通に通学する電車の中でいきなり目の前にバッタが現れて、すごいびっくりしたんですよ。それで、あれは何だろうっていうことで、横浜トリエンナーレに行き、その時に南條史生さんのステートメントを見て、すごく感銘を受けました。いずれ自分もこういうアートフェスティバルに関わるような仕事がしたいと思った。ちなみに私は今、写真祭の仕事をしていますけど、言いたいのはそこではなくて、横浜の街にいきなりバッタが現れたっていうことが、横浜の人、市民に受けとめられたという点です。

その後、横浜の黄金町こがねちょうっていう元々赤線だった、つまり売春街があつて、私はその黄金町の駅前にあるパチンコ屋の娘と高校の同級生だったので、しょっちゅう黄金町に高校生の時から出入りしてたんですよ。黄金町って売春宿なので、女子高校生が出入りするような場所ではないんですけど。そこが、日雇い労働の人の仕事がなくなって、売春宿に落とすお金がなくなり、売春宿自体が回らなくなったこともあるんですけども、行政がテコ入れして、アートの街になって、黄金町アートプロジェクトだったかな、マネジメントみたいなのが入って、いきなりその赤線街がアートの街になったっていうプロセスがあつた。

横浜市民はその前のトリエンナーレでバッタを見たり、いきなりワケの分からないオブジェが出てきたりして街が変わるっていうワンクッションあつたから、たぶん黄金町の変化っていうのも受け入れやすかつたんじゃないかと思います。実際、私の友人の黄金町で生まれ育つた子とかも、そこがアートの街になったっていうことを結構よく受け入れてたんですよ。でも、もしもそこがいきなり六本木ヒルズみたいになってたらどうだったのかなっていうのはいまだに思っています。その後また黄金町は色んな変遷を経て、最初のようなドロドロした「竜宮」って結構古い旅館がアートセンターになったりとか、どんどんクリーンにはなってるんですけども、すごくいい一つのロールモデルができたのも、私は結構あのバッタのお陰はあつたんじゃないかなって思います。あくまで個人的な感想ですけど、そういう意味では都市計画にも役立ったのではないかなと思っています。

吉岡 ありがとうございます。すばらしいご指摘だと思います。たしかに何か「役に立つ」っていうのはね、現代の我々がそういう価値感を押しつけられている際の意味っていうのは短期間が前提なんです。単年度とか、3年とかで何か効果が出るっていうことを「役に立つ」と言ってるんですよ。でも、あのバッタってもう22年前になるわけですが、今お聞きしたように、その後もずっと、そして今でもある意味影響を及ぼし続けているわけです。記憶の中には今も鮮明にある人が少なくないと思います。特に現代アートについてもトリエンナーレについても何も知らなかつた人が突然目撃して、「今のあれ、何だったんだ？」みたいなね。そういう記憶ってやっぱりずっと残り続けて、20年後とか30年後とかまで、何かその人の人生に影響を及ぼす可能性がある。

だから「役に立つ」ってそんなに簡単に自明のことじゃないんですよ。そのことは、時間的なスケールを変えて考えてみれば分かると思います。今、僕らがこんな話をしているということ自

体が、20年以上前に行われたことが現在に影響を及ぼしているのです、こういうのが世界の普通のあり方でしょう。一年ごとに何が役に立ち何が無駄かを評価することの方が、本当は非現実的で異常な状況なんですよ。なのに今はそれが常態化してる感じです。

発言者D 今回も大変有益なお話ありがとうございました。先ほどの黄金町のお話も、芸術祭を研究していた時に横浜に行ったんですけど、また新たな視点が加わってとても参考になりました。ありがとうございます。

一つ質問なのですが、横浜トリエンナーレの「バッタ」って聞いた時に「バッタもん」の方を頭に思い浮かべて、なるほど、なかなかよく考えたなと思ったんですけど、それとは全然関係ないような感じだったんで、ちょっと意外だったんです。バブル後だし、椿先生は関西の人だし、「バッタもん」みたいなユーモアのある皮肉めいたニュアンスを入れたのかなと、私はちょっと勝手にずっと思ってたんですけど……。このCGを作られた方には、そういう意識がなかったのか。どういう思いでバッタのCG作られたのかっていうのが一つ質問なんですけれども、いかがでしょうか。

吉岡 僕の知るかぎりでは、それは既にバッタというアイデアがあった後に、椿さんが学生にそれをCGで描いてみてと頼んだので、CGを作った人が考えたわけではないと思います。それから「バッタもん」ね……。室井さんの本のタイトルにもあるから、僕らバッタ、バッタって言うけど、正式にはバッタじゃなくて「インセクトワールド」っていう立派な作品名があるんですよ（笑）。だから「バッタもん」のニュアンスはまったくないと言っていいんじゃないでしょうか。「バッタもん」は岡本光博さんの有名な作品で……。

発言者D ルイ・ヴィトン。

吉岡 あれはたしかに「バッタもん」という言葉から発想されたものですね。ちなみに室井さんたちはバッタ以外の案もCGで検討したみたいです。でも、やっぱりバッタが圧倒的に凄かったというか……。会場「仮面ライダー」仮面ライダー？（笑）いや一直接には関係ないと思うけど、間接的にはたしかに、なぜ仮面ライダーが子供たちの想像力を虜にするかという、やはり人間と昆虫とが合体したサイボーグみたいなものがね、自分の身体を想像する上で面白いんですよ。子供の時、虫籠に入れた昆虫を何時間も見てるとね、完全に自分になる。昆虫と自分と同一化しているんですよ。頭の中では仮面ライダーになってるわけですね。いつまで見てんのってよく怒られましたが（笑）。

発言者E アートはそもそも役に立たないものだと思いますが、一方で、例えば助成金の申請をする時などは、めちゃめちゃ役に立つように書かなければなりません。特に若輩者のキュレーターとかアーティストは役に立つ度合いが大きければ大きいほど採用され、一方、大物になっていけばいくほど、まったく役に立たなそうなことを書いても通る。つまり偉くなれば、役に立たないことを役に立たないように示してもお金に到達できる人もいますが、大半はそうじゃない。ということは全体としては、一部の「役に立たない」アートが、大部分の「とっても役に立つ」アートに支えられているという構造なんじゃないかなって、聞いてて思ったんです。

めっちゃ「役に立つ」アートっていうのも、アーティストのプライドとしては「役に立たない」アートやってます、なんだけど、でもその構造によって二重カギ括弧つきのな「『役に立たない』アート」になってるんだなと思って今聞いてたんです。

でも私の問題は、このめっちゃ「役に立って」しまう、実は「役に立たない」アートというものが、今の経済的状況とか単年度で成果を出さなければいけないという社会的な要請によって生まれてるんだとしたら、この「役に立つ」部分を減らして本当に全体が「役に立たない」アートになっていくためには、何をすればいいと思いますか？

吉岡 日本政府による財政出動ですね。

発言者E それしかない……（笑）。

吉岡 もちろん国政はすぐには変わらないから、現場ではとりあえず、クラウドファンディングとかいろんな努力をしなければならない。でもそれが本質的解決じゃないという認識は、少なくとも共有した方がいいと思います。……ナマナマしい話で憂鬱になってきたけれども、とてもいい指摘だと思います。文脈をもうちょっと広げると、別にアートだけの問題じゃなくてね。例えば僕はまだ大学で教えてるので、毎年授業内容のシラバスを書けって言われるんですが、結構いい加減なことばかり書いているのに、一回も文句を言われたことないんですよ。つまり僕は年寄りで「エライ」からですね。もっと若い教員の人は、確かに彼女が言うように、めちゃくちゃ「役に立つ」講義内容のシラバスを書いています。（会場 そうですよ）

発言者E 私もシラバスは役に立つように書いてます。

吉岡 僕の世代の人の中には、（若者たちも）「もうちょっと好きなことをやればいいのに」と言う人がいるけどね。でも若い教員の側から言うと「お前らはいいよな」みたいな感じなんですよ。それと同じ構造なんです。うまく逃げ切ったというか、偉いからというよりももうあんまり先がないから許されてる、みたいな。少数の偉い先生たちの「役に立たない」授業が大多数の若手中堅の「役に立つ」授業に支えられているように、「役に立たない」アートっていうのは、ほとんどの「役に立つアート」にとって、何て言うかな、「スパイス」みたいな、「シンボル」みたいなものとして機能しているだけであると。これはなかなか辛辣な批評です。自分自身も、もしも今40歳ぐらいの若手大学教員だとしたら、やっぱり生き残るために「役に立つ」シラバス書くだらうと思うから。方便として、世の中と駆け引きをすることは必要だけれども、魂まで腐ってしまわないように気をつけるにはどうすればいいか……。

発言者E 私も大学教員として生き残るためにやるっていうのはしょうがないからやるとしても、じゃ「アート」ってことを考えると……。それはまあ、お役所仕事のなところだから、修正しろって言われたら修正するし、SDGs バッチを付けろって言われたら嫌でも付けるし、ということぐらいは受け入れてもいいけど、一方、アートのアート性っていうところを保つ時に、作品とか展示の内容を修正することが、仮にそのアートの本質と大きく相反する場合でも、それはその次のキャリアにつなげるチャンスだからみたいな理由で、結局折れてしまうようなことは、もう現場でかなり見てきたようなところがあつて。大学ならまだいいけど、アートでそれをやり続けていくと、アートそのものの価値が揺るがされる構造っていうか、ずっと船が揺れてるみたいな感じになってしまうから、それはどうすれば……。

吉岡 大学もアート界も、本質的にはおんなじような状況だと思います。これは方便だからと思ってやってもね、毎日やらされたら洗脳されて本気になっちゃうんです。さっきは世代間の問題みたいな言い方をしたけど、よく考えてみたら、僕と同じ世代の人がじゃあみんな好きなことやっているかという、ほとんどはやっぱり「役に立つ」ことやってますよ。彼らは若者よりは比較的大目に見てもらえるはずだから、本当はそこまでやらなくていいのに自分で自分に縛りかけてる。自粛というか付度というか、そういう習慣がついてしまったのね。年長者がそうすると若者たちはますます自由にできなくなる。

そこをもう少し自由にするには、みんなでやるしかないのかな。最初の映像で室井さんと話していた中で、シラバスにSDGsのどの項目に役に立つか書かなきゃいけないのに対して「全てに役に立ちます」と書けば文句言えないわけでしょう。みんながそう書けば書きやすいし、教務係の職員の人たちもそれを粛々と通せばいい。「何の役に立つか？」に対して「すべてに役に立つ」という答えは、相手の基準を逆手に取る脱構築的戦略というか、相手の強さを利用して相手を投げるヤワラな精神というか……。これはアートの戦い方とも言えるのではないだろうか。ともかく、何よりもそういうことをみんなで面白がるのが大事だと思います。

まあすべてがそんな風にはうまく行かないけど、今の状況自体が間違っているという認識はみんなでも共有すべきですね。今すぐに革命は起こせないし、革命は必ず失敗するけど、今の状況は間違ってるって言い合える場は失わないようにしないといけない。特にコロナ以降、そういう場が失われてきました。それ以前は、たとえば会議室では「そうですね、やっぱり役に立たなきゃ」みたいなことで合意した後、喫煙所とか、飲み会とかでは「あんなバカなこと決めても意味ないのに」みたいな愚痴を言い合うことでバランス取ってたんだけど、このバランスとる場所がもうない。喫煙所もないし、オンライン会議だったら終了後飲みにも行けない。

そういう場所自体もまた、何の役に立つのかと問われれば、「役に立たない」場所ですよ。しかしそうした場所の存在が決定的に大切だと思います。現在職場でも学校でも、仕事以外のところで仲間どうしが喋る機会がどんどん奪われている。忙しくなって、雑談も、飲み会もない。だから基本的な共通理解みたいなものを持ちにくくなった。集会の自由は存在するのに、自粛してやらないし、集まって喋りしてもしょうがないというムードが広がっている。強制されていないのにみんなが集まらなくなるというのは、すごく怖いことだなと思っています。でも禁止されているわけじゃないからね。だからこの講座もやっている（笑）。そう思っています。

2023年7月22日(土) 於：京都芸術センター「大広間」